

曹洞宗総合研究センター第13回学術大会特別部会
東日本大震災をうけて、いま私たちに何ができるのかを考えるシンポジウム
開催報告④

平成23年10月24日 午前10時～ 於 曹洞宗檀信徒会館3階 桜の間

第1部「被災者と共に歩む～東日本大震災の支援活動に学ぶ」
パネル発表「組織の枠組みを超えた連携を目指して」②

発表者② 京都自死・自殺相談センターが果たした被災地支援の役割
京都自死・自殺相談センター 野呂靖師

ただいまご紹介いただきました、NPO法人京都自死・自殺相談センターの副代表をしております野呂と申します。私は浄土真宗本願寺派の僧侶であり、本願寺派に附置されている教学伝道研究センター（現・浄土真宗本願寺派総合研究所）の研究員です。研究センターでは、私たち研究員が自死問題について、例えば仏教ではどう考えるのか、あるいは宗教者はどういった役割をもっているのかという研究を5年前から続けておりました。しかし、「単に頭で考えるだけではなくて、実際に生じている苦悩に直接向き合いたい」という思いから、電話相談を中心とする京都自死・自殺相談センターが生まれました。今日は、遠く離れた関西からどのような関わり方ができるのか、という観点から、本当に微々たる取り組みではありますが、私たちが普段行っている自死にまつわる活動と関連した、被災者の心を支える取り組みについてお話をいたします。

まず簡単に相談センターについて紹介させていただきますが、午前中に北村さんが、「震災は誰もが直面する可能性のある自分自身の問題だ」とおっしゃっておられましたが（本誌5月号）、本当にそうだなと思いました。実は自死の問題もまったく同じ構造だと思うのです。例えば、私も含めて多くの方がまさか自分が自死によって3年後や5年後に死ぬとは思っていませんが、もしかしたら起こりうるかもしれません。また、まさか自分の大切な人が自ら命を落とすとは思っていませんが、しかしその可能性は十分にありえます。そうした意味では、自死も今回の震災も、まさに「私たち自身の問題である」ということをあらためて強く感じております。

1、京都自死・自殺相談センター

さて、この相談センターは、研究センターの研究員が中心となって立ち上げたものです。現在約50人のスタッフと活動をともにしていますが、私も含めて全員がボランティアです。活動としては、週末深夜の電話相談を中心に、講演会等による啓発活動や、大切な方

を亡くされたご遺族への支援として「分かち合いの会」を開くなどを行っています。

電話をとっていますと、実に9割の方が、「もう死にたいんだ」という思いをもっておられます。なかには「今実行しているところです」と言ってかけてこられる方や、「先ほど何度も首をつろうとしたんだけど、恐くなって止めました」とおっしゃる、まさに未遂の直後という方からもかかってまいります。そうすると私たちはびっくりして、喫緊の支援が必要なときであれば、近くであれば車をとばしてその方の元に向かうこともあります。基本的には京都府内であればどこでも行こう、という気持ちで相談を受けています。

2、震災と自死

そうした電話相談から見えてきたことですが、この度の「震災と自死」という関係で申しますと、やはり3.11以降、「被災された方の自死」と、「支援者の自死」という問題が非常に重要だと感じています。すでに報道でも取り上げられているかと思いますが、内閣府の調査で少し前のデータですが、実は6月と7月の2ヵ月間、東北3県だけで少なくとも22人の方が、被災に関するなんらかの理由によって自死された、という結果がでているのです。午前中のご発表を聞いておりましたが、おそらくもっと多いのではないかと思います。またつい先日のニュースでは震災の支援に当たっていた自衛官が命を絶ったという話もあります。支援者が自死している、追い詰められているということです。

災害時の自殺率というのを考えますと、阪神淡路大震災のときもそうでしたが、起こった直後にすぐに自殺者が急増するわけではありません。生活が落ち着いた半年後や1年後、あるいは3年後といった長期のスパンの中で、生活は落ち着いたんだけど、ぱっと自分自身の現状が見えてきたときに、どうしようもなくなってくるということが起こるのです。そうした意味で、私たちは長期の視点でプログラムを作っていくかなくてはならないなと感じているところです。

3、被災者向けの電話相談

そこで次に、そうした取り組みの1番最初の段階として行っている活動を報告します。大きく2つございます。1つめは被災者向けの電話相談です。こちらは先ほど名前が出ましたけれども、NPO法人ライフリンクという東京を中心とした自殺対策のNPO団体ですが、そこが声かけ役となって全国の民間団体と連携して行っているもので、私たちも所属しております。

名前からも分かりますように、さまざまな状況で家族を亡くされた方、もちろん家族だけではなくて友人もそうですが、その方がたのお気持ちを大切にお聞きするものです。こちらは東北3県からでしたら、フリーダイヤルです。私たちの相談センターでは毎週日曜日に担当しております一実は昨日もその電話を受けた後にこちらに参りましたが、7月31日の時点で、215件かかってきております。ですから、今月（10月）の時点ではおそらく300件弱くらいかと思います。

当初、私たちがこういった電話をとろうとしたときに、正直なところ一番不安だったのが、小さなことなんですけれども、お話しされる言葉がちゃんと分かるのかなということでした。私も関西出身ですし、東北の方の方言が分かるのだろうかとか、いろいろ不安を抱えていたんですけれども、実はまったく杞憂でした。1つひとつの言葉を大切に聞かせていただく際には、言葉の違いはまったく問題ありませんでした。また、はたしてお電話がかかってくるだろうかという心配もあったんですが、これもまったくそんなことはありませんでした。

4、移転された方がたへのこころのケア

2つめは、実は忘れられがちな存在だと思うのですが、今回の震災では多くの方が故郷を離れて、日本各地に仮に移転されております。関西にも、兵庫、大阪、京都の3県で約3千人の方が移転されているんですね。そうした方がたに、東北3県では多くのボランティアがいるわけですが、移住している先への支援、心のケアというのは忘れられがちなんです。そこをどうにかできないかということで、私たちは関西3県で活動している団体と共に、電話相談のフリーダイヤルを6月から開設いたしました。遠く離れたところに来られているわけですし、お住まいになる環境がまったく違いますから、住宅の問題、経済的な問題がただちに発生するはずです。そこで、司法書士さんや弁護士さんと連携をとって、すぐに連絡が出来る状態に準備しておりました。

ところが実は、経済的な問題とか、住宅の問題とか具体的な相談というのはほとんど無いんですね。ご相談の多くは、「もう立っていられないんだ」、「本当に苦しいんだ」、なかには「本当に死にたいんだ」という声でした。つまり、「具体的なこと」ではなく、「気持ち」の面のサポートが必要であるということ、ここが特徴的でした。

5、2つの取り組みから見えてきたこと

次にこの2つの取り組みから見えてきたことをお話しさせていただきます。1つ目は先ほども言いましたように、「こういう状態が続くんだったら死んだ方がましです」とおっしゃる方が本当に多い。自死念慮ですね。なぜ自死念慮が高いと分かるかと申しますと、私たちの相談センターがとっている電話では必ず、「死にたくなっていますか？」とお尋ねするのです。一般には、自殺の意志について質問するとむしろ逆効果なのではないか、と不安を抱かれる方がおられるのですが、「本当に心配している」という相談員の気持ちがかきちんと出ているならば、心配はありません。むしろ、「今死にたくなっていますか？」と聞くことで、その方が本当に思っていることに、ふっと踏み込むことが出来る場合があります。この前もそうだったのですけれども、第一声から明るい声で電話をかけてこられた方がいらっしゃったんですね。家族を亡くされた方なのですが、「私は全然元気なんですよ」とおっしゃるんですね。そしたらあるとき、もう一度「どうですか？」とお聞きしたら、「夜になったら死にたい気持ちが出てくる」、とぼつりとおっしゃったんですね。もちろん、無

理に辛い気持ちを聞き出す必要はまったくありません。しかし、しっかりとその方の苦悩に向き合うためには、死にたいとまで考えておられる気持ちに敏感になり、大切に受け取る必要があると考えています。

2番目ですけれども、さきほど「具体的な支援よりも、気持ちを訴えてくる方が多い」と申し上げましたが、本当に気持ちの面の支援が非常に重要であると改めて気づいております。電話相談の現場に限ったことかもしれませんが、物理的・経済的な支援の必要というのは私の思っている限りですけど、現時点ではあまり感じておりません。

3番目は、ここを一番強調したい点なんですけど、日頃から行っている僧侶の活動が、緊急の震災時に役立つということですね。曹洞宗さんですと、『自死に向き合う』というリーフレットを作られまして、全国寺院に配布されているということですけども、こうした日常の心に向き合う活動が重要だと思います。いってみれば、自死に向き合うというのは本当に究極的というか、命に関する問題であり、緊急性の高い問題です。それだけに、日頃経験を積んでいるからこそ、いざという時に対応できるのですね。

最後に4番目ですが、「もう1人の被災者に向き合う」ということをレジュメに書かせていただきました。これはどういうことかといいますと、私はずっと「被災者」という言葉はどういうくくりで、どういう方がたを指すのかということを考えてまいりました。いうまでもなく、直接的に被災された方はもちろんなんですけど、普段私たちの自殺の相談電話では、3月の震災があった直後から、これまで自死念慮をもってかけてきておられた方が、次のようにおっしゃる電話が急増しました。「今すごくつらいんです」と。「どうしたんですか？」とお聞きすると、「震災以降、日本中がいかに生きるかとか、前向きな気持ちが高まっている。ニュースを見ても、なんとか頑張らなくてはいけない、生きていることはすばらしい、なんとか生き抜いていくんだというようなニュースが流れる。でもそれがすごくつらいんです」とおっしゃいました。つまり、ずっと自死念慮を抱えて、「早く死にたい」という気持ちを持っている自分には「居場所」がないというか、「自分の考えていることはなんて駄目なんだろう」と責めてしまわれるのですね。私はこれを聞いたときに、はっと思いました。本当にそうだなと思ったんです。つまり、生き抜いていこうという言葉は大変温かいものですが、一方で、逆にその考え方が、苦悩を生み出しているという面もあるんだということに気づかされたわけです。そうした意味では、多くの自死念慮をもっている方もまた、震災の大きな影響を受けているということであり、もちろんこれは語弊があるかもしれませんが、「もう1つの被災者」といえるのではないかと感じました。こうした声は非常にか細く、あまり注目されないんですけども、私たちは決して忘れてはいけないんじゃないかと思っております。

時間を超過いたしましたけど、ひとまず私からは以上です。ありがとうございました。

発表者③ 寺族と共に取り組む支援活動モデルの提案—絵本プロジェクト活動から
センター専任研究員 久保田永俊師

曹洞宗総合研究センター専任研究員の久保田永俊と申します。よろしくお願ひ致します。

1、プロジェクト経緯

このプロジェクトの経緯ですが、阪神淡路大震災の教訓をもとに、中・長期にわたる被災者への支援が必要だったことを踏まえ、僧侶だから出来ること、今の私たちだからできることを検討してまいりました。この企画には幾つかの要素が複合して成り立っています。

第1に、当センターでは震災発生前まで「祈りの集い～自死者供養の会～」を行ってきました。大切な方を自死で亡くされた遺族の対応、接し方などが、被災者への対応で活かせるのではないかと考え、「傾聴」活動に改めて焦点をあてました。遺族によっては「家族を助けてあげられなかった。生前、こうしてあげれば良かった」などの自責の思いが潜在的にありますので、被災された方からも、胸の内をお聴きする取り組みをしようと思いました。

この傾聴については、曹洞宗こころの問題研究プロジェクトで作製された冊子『人びとのこころに向き合うために』の中に書かれております。こうした冊子からの学びだけでなく、自死遺族を支援するNPO法人で、自分が学んできたことも今回の企画に繋がっています。

第2に、当センターには「教化研修部門」という人材養成の部門があります。私はこの出身です。この部門では仏教や禅に対する学びだけではなく、学んだ教えをどのように布教教化へと展開していくか、実習などを通じて日々研鑽しています。

その中でも今回、有益だったのが「伝道実習」です。この伝道実習は幼稚園や保育園、高齢者の福祉施設において、人形劇や人間劇、あるいは紙芝居などを行います。この実習では対象者に合わせて、どのように対応していくのか、その実践を学ばせていただいたのが大きな成果です。

それらが、今回の活動の礎となったと言えます。このプロジェクトでは、震災で被災された方がたの支援を考え、私や他の研究員、センター修了生と共に、これまでの学びを具体的かつ行動に移し企画した結果、展開しています。

2、僧侶と寺族の連携

次に僧侶と寺族との連携した支援活動を行ってみて、次のことが分かって参りました。それは僧侶と寺族が同じ教化者であり、信仰者であることです。僧侶と寺族が共に被災者を支えるには、どういうことができるのかを検討してみました。その結果、傾聴活動であれば、両者が共に関っていけるのではないかと。むしろ、寺族の皆さんのほうが、被災者との会話でも、話しやすいのではないかとおられます。

3、企画名を検討する

まず私たちは、福島市飯坂温泉観光会館・パルセ飯坂が避難所として使用されている時にうかがいました。この時の告知は「自分だけのビーズ・ブレスレットを作ろう」という名前で実施しています。なぜ「数珠」と言わずに、ビーズ・ブレスレットという言い方をしているのか、疑問を抱かれた方もいらっしゃると思います。

この企画を実施する側が公的な施設等で宗教的な行為をするつもりがなくても、行政側が、この企画を宗教的な行為として捉えかねないからです。そのため企画そのものが相手側に受け入れてもらいやすいように、名前から配慮しました。

4、寺族、他宗派の協力

避難所の告知ポスターは若い寺族さんが協力して描いてくださいました。一緒に現地で支援活動を行われた方がたは、東北管区寺族会の山形県から3名、福島県から5名、福島県曹洞宗青年会の方2名にご参加いただき、多くのご協力をいただきました。教団付置研究所という連携から、浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター（現・浄土真宗本願寺派総合研究所）の研究員3名の先生方にもご協力いただきました。私の隣にいらっしゃる金沢豊先生にも、お越しいただいております。今後の実施予定ですが、11月の半ばからまた継続して支援活動を行います。すでに実施した支援先と被る部分がございます。この場所では、ビーズ・ブレスレットをすでに作製しましたが、そのメンテナンスという形でしょうかっていくような関り方をしていき、傾聴活動を継続したいと考えております。

5、ビーズ・ブレスレット作製を通じた傾聴活動

ビーズ・ブレスレット作製に用意したビーズは、主にアクリルビーズを用いていますが、1個だけ天然石を使用しました。1ヵ所だけ天然石を使用し、その他はアクリルビーズを使っています。参加された方によっては、ご家族の誕生月にあわせて作りたい方もいらっしゃって、ビーズ・ブレスレットの作製をしております。特に好評だった天然石の色は透明感があり、華やかな色のものが好まれていたようです。私たちがうかがった日は「父の日」の翌日だったこともあり、ある小学生から次のように話してくれました。「父の日に手紙しかあげられなかったので、今日こういう人たち（ボランティア）が来てブレスレットを作れるんだったら、自分が作ったブレスレットをお父さんにあげたい」。この言葉に私たちも何か1つ役に立てたような気がいたしました。

また家族全員の分を作られる方も、いらっしゃいました。作製後に作られたブレスレットについてお尋ねしてみると、着の身着のまま避難してきたお話や、今後の生活の不安などさまざま話してくださいました。作られた方のさまざまな思いが詰まったビーズ・ブレスレットでした。

6、寺族のきめ細やかな対応と支援

寺族さんの協力として、他にもご紹介したいことがあります。私たちが保育園等にうかがった際に使用する名札です。先程、告知用のポスターのことを述べました。私たち男性ですと、手芸のような針仕事は割と苦手です。使用する名札、先のポスター作製を福島県常泉寺寺族、中野郁弥さんが行って下さいました。直接、寺族さんが支援先にうかがうことができなくても、こうした支援に関係するものを作製することで、支援ができると私は考えています。男性が苦手な領域について、寺族さんが有している、きめ細やかさで対応ができるのではないのでしょうか。

保育園等で実施したプログラムは一例ですが、今まで私たちが教化研修部門で学んできた、伝道実習をベースにしています。

会場では、まず子どもたちと歌を歌ったり、手遊びを行ったりしております。これは、「アイスブレイク」といってお互いの緊張をほぐし、お互いの距離感を縮めるために行うものです。

上演した紙芝居については、宗務庁教化部から借用した紙芝居を使わせていただきました。絵本や紙芝居を選ぶ上で注意した点は、大津波などをイメージさせる海や河川、水辺が登場する絵本や紙芝居等は選択しなかったことです。

仮設住宅内の集会所で紙芝居を実施しました。子どもたちにしか受け入れてもらえないのではないかと心配していましたが、大人の皆さんの方が熱心に聴いてくださっていたように思われます。ある集会所では、小さなお子さんを抱えたお母さんが来て「ポスターに紙芝居があると書かれていたので来ました」と話して下さいました。たまたまうかがった集会場には、小さなお子さんは1人しかおりませんでした。上演したところ、周りの大人の方が静かに聴いてくださっていたという状況でした。他の仮設住宅の集会所でも同様の傾向がありました。「ポスターに紙芝居があるから待っているんだけど、まだやらないのか」と言ってく下さった、ご年配の方も多数いらっしゃいます。

寺族さんの協力は他にもあります。山形県、福島県からお越しいただいた寺族さんは、目の前にいらっしゃる方のために、1杯ずつ、丁寧にお茶を点てていました。茶道で、よく重んじられている「一期一会」という言葉がありますが、「人との出会いを一生に一度のものと思い、相手に対し最善を尽くす」という意味の言葉です。私は、その姿から「1人に向き合う」ことの姿勢を改めて、教えていただいた気がします。

お点前だけでなく、寺族さん方が被災された方のお話を聞き、ビーズ・ブレスレットの作製にも、お手伝いいただきました。「似合うちゃー（似合っているわね）」とか、「こっちの色の方が良いんねが？（こっちの色が似合うんじゃない?）」等、そういう女性同士の会話で温かさが生まれ、その場が温かい感じになりました。来られた寺族さんは東北出身ということもあり、言葉に独特の訛りがあったのも、被災された方には親近感があったようです。

この傾聴活動を通じてですが、保育園の職員さんと話をしたところ、「震災で遺体が見つ

からないし、たぶん海に流されてしまっていると思うが、お線香を上げるのも変かもしれないし、どうしたらよいでしょうか」等の質問を、お寄せいただいた方もいらっしゃいます。

私たちが自死遺族と接するにあたり、日頃から傾聴について学んでいるおかげで、話を聞かせていただいているのではないかと思います。

7. 傾聴を通じた支援活動と連携について

僧侶と寺族の連携、および今後の可能性については「傾聴」を通じて、同じ目線で、僧侶も寺族もフラットなところから、共に支援ができるのではないかと思います。他に、僧侶や寺族だけでなく、他の宗派の皆さんや一般の方とも相互の連携がしやすく、ボランティアとしても一体感が生まれやすいと思います。

日常から自死という問題に向き合い、傾聴という学びを続けることで、人びととの向き合い方が自分自身変わってきたと思います。こうした学びを行っていくことは重要であり、普段から人との関わりをおろそかにしない、自分にとって他者の問題が些細なことと感じるかも知れませんが、当事者にとっては大きな問題であり、どのように人びとと向き合うのか、そこから出発しなければいけないと思います。

今後もビーズ・ブレスレットの作製を通じて、被災された方のお話を聴かせていただき、長期的な支援を寺族さんや、他の宗派の皆さん、一般の方がたとも連携して行っていきたいと考えています。私からは以上でございます。

宇野 ありがとうございます。子ども向けのイベントですとか、福祉施設のことなどを土台として、被災地で対応してくださったことのご報告でございました。他の宗派の方と話をさせていただくと考えることがございまして、寺族さんと僧侶というものが、例えば野呂先生の宗派ですと、あまり位置づけとしてそんなに変わらないんだろうかと、同じく対等にやっておられる感じが非常にうらやましいなと思っていました。

こうしたことは、むしろ寺族さんのほうが得意なのかもしれないと思いながら、一緒にやっていくことも考えなければならぬと思っています。では続きまして、4番です。「宗派を超えた傾聴ボランティア活動の可能性」ということで金沢先生、お願い致します。

発表者④宗派を超えた傾聴ボランティア活動の可能性—浄土真宗本願寺派の取り組みから 浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター 金沢豊師

浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター（現・浄土真宗本願寺派総合研究所）の研究員、金沢豊と申します。宗派を超えた活動の可能性に焦点を当てまして、お話をさせていただきます。

1、緊急支援から復興支援へ

3月11日以降、本願寺派は仙台別院に即時災害対策本部を設け、震災復興支援活動に当たっています。これまでに全国から延べ7120人のボランティアを受け入れ、無料の宿泊場所を提供しました。ボランティア活動のコーディネートや支援物資の集約、保管、分配など、出来る限り被災者の声に応えようと活動を繰り返してきました。

現在は緊急支援から復興支援へとと言われておりますように、コミュニティ形成の手伝い、仮設住宅への訪問、自治会の声に応える活動を中心としています。しかしながら、それによって物資の支援というものを絶やさずに、これからも継続し、プラスして「こころのケア」活動にシフトしていきたいと考えています。

こころのケア活動とは、まだ試行錯誤中ですが、仮設住宅にお邪魔し、各お部屋に直接訪問するという活動を繰り返し行っている最中です。そのことは後で具体的にお話をさせていただきます。そして、こうした活動に取り組む際には、超宗派での取り組みが大変重要だと感じています。加えまして、今回の発表の趣旨は、本年私どもの宗派で修行中の親鸞聖人750回大遠忌法要で明示している「被災者の悲しみに寄り添う」と関連します。

2、本願寺派の取り組みについて

まず最初に、本願寺派の取り組みをご紹介します。東北の被災状況ですが、東北教区という1つのくくりの中に、青森県、岩手県、秋田県、山形県、宮城県、福島県のすべての地域を含んでいます。その中に151カ所の寺院があり、仙台市青葉区にある仙台別院が統括しております。このたびの大地震、大津波により、全壊した寺院は2カ所ありました。

こういった被災情報を情報収集した上で、仙台別院の敷地内に、3月13日に自然発生的に集まってくださった方がたによって「東北教区災害ボランティアセンター」が設立され、本山から事務職員が出向している状況です。

そしてもう1カ所、岩手県花巻市東和町で廃校となった小学校を利用し、岩手の内陸部に避難されている方のケア活動をこれから始めようとしています。仙台市青葉区から支援を必要とされている場所に行くには長時間、移動に費やします。今、私どもができることは、非常に限られた場所ですが、仙台市をベースとして名取市や岩沼市、南三陸町から南は南相馬の方まで、何度も継続的に支援活動を行うことです。こうした活動の詳細は、本願寺派の公式ホームページ (http://www.hongwanji.or.jp/post_24.html) に掲載されておりますのでご参照ください。

3、教団による支援の反省点を共有する

実は、現在私が最も重要視しているのは、「反省点の共有」です。精神科医の中井久夫先生が阪神淡路大震災の直後に書かれた著書に、次の文章がありました。

「指示を待った者は何ごともなしえなかった。統制、調整、一元化を要求した者は現場

の足をしばしば引っ張った」

これは阪神淡路大震災の直後、緊急時のトップダウン系統には限界があることを指摘しているのです。このことを私たちの身に引き当てて考えますと、本当に襟を正される思いです。

そこから考えられるのは先程、大菅先生のご指摘（本誌6月号）にもあったように、小さな活動のバックアップが、宗門に求められることではないかと思うのです。もちろん、皆さまは「お前が本願寺派の反省点を述べて我われにどうしろというんだ」と思われるかもしれませんが、反省点を共有することで共に前進できるのではないかと考えています。

良かったこと、成功したことの事例を挙げるのは簡単だと思います。自分たちは何が出来なかったかの、言いたくても言えないというのが、大きな組織の特徴なのかもしれません。

4、平常時の備え

私たちの場合、緊急支援時における混乱がありました。災害が起こった時に、どのような動きをすればいいのか、シミュレーションの再構築を迫られました。

実は6月の時点で曹洞宗さまから興味深いお話をうかがいました。こちらでは防災士という資格をお持ちの方がいらっしゃるんですね。また、防災士の方やSVAのような国際ボランティアセンターとが密接な関係があることを、その時初めて知りました。

そうすると、やはり平常時から緊急時を想定しコーディネーターを養成する視点が、必要だと考えます。そうすれば、次にお話しする問題は起こらなかったかもしれません。いわゆる義捐金と支援金の問題です。たくさんのお金が宗門に届けられました。その義捐金の分配も完了し、行政の手に復興支援として届けられました。支援者の支援、細くても長い支援の必要性というものが、ここにきて露わになってきています。すなわち午前中に石ヶ森さんからご指摘がありましたように（本誌5月号）、支援する方へのバックアップが大変必要になってきています。改めて支援金を要望するのではなく、最初の段階から、義捐金、支援金の2つの窓口を設けることが出来れば、もう少しスムーズだったのではないかと、私は思っております。

5、ことばと態度

もう1つは、「頑張ろう」という言葉の問題です。京都など遠隔地からボランティアにうかがう場合、やはり集団的なお節介になる可能性を常にはらんでいると思います。その際に安易な頑張ろうという言葉は、本当に罪深い言葉だと感じるのです。被災者の方はきっとこう思うでしょう「これだけ頑張っているんだ、これ以上何を頑張れというのだ」と。

私はお互いの顔が見える活動の中で、頑張ろうという言葉は有効だと思います。人間関係の双方向が出来てから初めて、支援を継続して顔が見える活動とし、人と人との信頼関係ができ、共に歩いていく中で始めて出てくる言葉でないかと思うのです。安易な言葉が

人を傷つけるのは、野呂の方からもございました、自死、自殺とも深く関ることなのではないかと思えます。

顔の見える活動について、重要なのは「時間をかける」こととも言われています。しかし、被災地以外から支援に行った場合、付きっきりで支援することはできません。長期滞在して支援できる人は、人の気持ちに寄り添えて、長くいられない、時間をかけられない人は、被災者の気持ちに寄り添えないのでしょうか。私は決してそうではないと思えます。

「時間をかければ相手は心を開く」これも決して万人に当てはまる単純な話ではないと思えます。やはり、そこには1人の人間としての態度、姿勢、気持ちが一番重要でしょう。しばしば、「あなたは被災地に、何回行っているか」「あなたはどれだけ関わっているか」という話が遠隔地でも出る話があります。ボランティアはそういったものを競い合う場ではありません。

6、「宗派を超えた？傾聴ボランティア」

宗派を超えた傾聴ボランティアというタイトル中に「？」をつけました。これは各種団体が、他宗派と連携し活動することを想定しています。このことは実際に具体化させており、久保田先生からご紹介いただいた通り、ビーズ・ブレスレットの活動にも参加させていただきました。ここにもビーズ・ブレスレットを作ったものをお持ちしておりますが、作業系の支援というものが、非常に人びとと向き合い、横に座り、話を出来るきっかけになるなど実感しました。他には、理容師の方をお呼びして集合住宅でヘアカットの日があり、そこに参加させていただきました。ヘアカットするまでの待ち時間があります。震災で髪を切れなかった方たちが老若男女集まります。そうしたカット待ちの時間に話を聴かせていただくことが可能でした。

こころのケア活動は、今後さまざまな展開を見せていくと思えます。他団体や他宗派の活動から得る学びが多くあります。私たちだけで何とかしようという気持ちはまったくといていい程ありませんし、そのような資格もないのではないかと思えます。被災地活動において「宗派を超える」、「超宗派」という言葉は適切ではないのかなと思うくらい、フラットな関係で支援活動に当たらせていただいております。その意味でタイトルに「？」を付しました。

7、ボランティアの役割

そして、ボランティアの役割として、ニーズがある場合は別として、コンテンツを持ち込む必要はないと思えます。瓦礫や流入物の撤去、物資を避難所に運ぶ作業は、収束しつつあります。これから、支援できることがないんだと、特に関西以西の支援者の方がたから聞きます。非常に役割不全を感じられる方も多いようです。そうした方は「何かをしよう、してあげたい。こういったことがやれるんだ」という気持ちをお持ちだと思います。是非、自分のしたいことをするのではなくて、そちらにとにかく赴く、そしてそこでお茶

を飲み、時にはお酒を飲み交わす、そういう中で求められる役割を、見つけてくださればいいのではないかと考えます。

8、宗派を超えた活動の利点

これまで宗派を超える視点でやや感情的に話を進めて参りましたが冷静に考えて、見逃せない点があります。超宗派の宗教者による取り組みは、布教目的ではないことが明白ですので、行政との交渉がしやすくなるメリットがあります。曹洞宗の僧侶の方と仮設住宅を回らせていただくと見た目にも特定の宗派の活動ではないことが明らかです。俗っぽい僧侶の自分には、住民の方の視線がひしひしと伝わってきます。このことは避難されている方がたとの会話の潤滑油になり得るかもしれません。先日うかがった仮設住宅では、「あなた本当に和尚さんですか？」と聞かれてしまいました。

そういった支援の本題とは少し逸れた会話の中にも、ふっと心が和らぐ瞬間が訪れるのだと思います。

次に、コンテンツの複合化という利点があります。曹洞宗さまのビーズ・ブレスレット作製や他宗のミサンガを作るイベントなどいろんなコンテンツを各宗派が練り上げています。それらを合わせることで、相乗効果が生まれると考えています。その上で協議し反省点も出した上で、協力できる支援が望まれます。

教団の協力ありきの活動ではなく、思いをシェアすることで、活動のコミュニティが生まれると考えています。そこに目的意識の共有ということ強く意識したいと思います。目的意識の共有という点では、超宗教のメンバーが集まる「心の相談室」という団体や、「傾聴に取り組む宗教者の会」、がすばらしい活動を継続しています。

9、被災地支援≠被災者支援

被災地支援は必ずしも被災者支援ということにはなりません。寺院の少ない私たちに来ることは後者です。なかなか震災以前は、縁のなかった土地に外部から人間が行って、一体、何が出来るのか、と悩まされる時期が続きました。被災地丸ごとの支援ではなく、被災者の支援がなし得るのではないかとということに気づかされました。実はこのことに気づいたのは、シャンティさんの気仙沼事務所に7月以降、2度訪問した時でした。シャンティさんは本吉地区を丸ごとケアする姿勢をアドバイスしてくださいました。私たちは仙台をベースにして、それが出来るのか、そこまでは出来ないのではないかと考え、相対化して考えたおかげで、被災者支援のビジョンを明確に持てるようになりました。今でも時々シャンティさんにうかがって、問題点を共有しています。

被災者の支援ですが、仮設住宅の集会所で「お茶会をしますよ」と言われて出てこられる方も大事ですが、私は出て来ることが叶わない方を対象にしたいと考えております。さまざまな事情で集会所に出てこれない方のお宅に訪問する活動です。訪問方法は実際に、「集会所でお茶会をやっていきますよ」という宣伝も兼ねるのですがそれは二義的です。特

に、お茶会に参加される方は女性が多いのです。男性の方は時間の都合上もあるのかもしれませんが、出てこられない方が多いです。

そういった、外に出ることが叶わない方のケアが出来ればと考えていますが、同時にボランティアの質が大変問われています。そもそも私には「傾聴ボランティアは、こういうものだ」という固定的な考え方はありません。お宅を訪問して会話をする中で、「本当にこれでいいのか、これで正しいのか、相手の話が聞けているのか」を常に自分に問い続けられる人。そういう人が具体的なケースを交えて共に学び、被災者の方と寄り添っていくことが可能になるのではないかと考えております。人の心に寄り添うことに関して、「京都自死・自殺相談センター」のボランティア養成講座プランを仙台に持ってきてもらって、仙台別院で講習会を開きたいと思います。

10、第三者による支援の有意性

そして支援者のもう1つの壁は、第三者の支援です。東北地方以外から支援をしている、同じ経験を共有していない、そういった人間に何が分かるのか、どういったことが聞けるのか、ということです。

そこで皆さまのお考えに照らし合わせて考えていただきたいのですが、身近な人に深刻な相談を出来るでしょうか？

ご家族の方に自分自身が、例えば死にたいという思いを伝えることが出来るでしょうか。深刻な悩みや、つらい気持ちは、仮設で暮らす皆さんが持っているようです。そして、その程度に優劣はありません。

こちらの方がつらいとか、身近な方ですと、お互いの比べ合いになってきます。そういうときこそ第三者の傾聴の可能性が出てくるのではないのでしょうか。私たちは臨床心理士や、傾聴のプロではありません。ノンプロという立場で、相手のことを分かりたいという姿勢で、お話を聴かせていただきたいと考えています。そして我われが行ってボランティアをするだけでなく、被災された方が傾聴ボランティアをされている方と会うことが多いです。そして、9割くらいが女性の方です。中井先生も仰っておりましたが、阪神淡路大震災のときの傾聴ボランティアは、9割の方が女性だったそうです。男性も女性も協働してお話が聴けるようになれば、より幅が広がるのではないのでしょうか。

生活の現場が一転した被災者ですから、支援の仕方そのものを1から考えることが大切で「被災者の悲しみに寄り添うこと」なのではないかと考えております。

11、「傾聴ボランティア」とは

最後になりますが、傾聴ボランティアの活動とは「被災者の悲嘆の傍らに立つこと」ではないかと苦悶しながら保持している私の現在の結論です。今後も、被災された方が安心して悲しめる場、時間になり得れば、という姿勢で活動を続けてまいります。被災者目線に立つ、自らを横に置いて話を聞く、寄り添うことが本当に出来ているのかという、「ふり

返りを重要視する」ことも必須でしょう。

傾聴は問題を解決しに行くものではありません。私たちが一方的に赴き、問題解決を図るのではなく、現地の方がたの手で支援が盛り上がっていくことが重要です。最初は養成講座のシステムを提供する形を取りましたが、現地の方がたと一緒になって、中・長期的プランを組んで、活動を色彩豊かに実りあるものとしていきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

**発表者⑤ ボランティアの対立と被災者以外の「おいてきぼり感」を考える、
センター委託研究員 前田宥全師**

曹洞宗こころの問題研究プロジェクト委託研究員の前田と申します。よろしくお願いたします。午前中からたくさんの活動をされていらっしゃる方のご報告がございましたので、重複する部分があるかと思いますが、その点はお許しいただきたいと思います。私の場合は、3月11日の震災前からの活動の経験や震災後の活動から、組織を超えた連携につきまして考えさせていただきました。

震災後、主に私がしてきた活動は3点あります。1つはカウンセラーとしての避難所で行った対話活動です。2つ目は電話相談、手紙相談。これは先ほど、野呂さんが触れてくださいました、NPO法人ライフリンクが主催しております活動に参画しております。3つ目は支援側ハイリスク者との対話。これは私がどう表現したらいいか分からなかったもので、あえてこういう風に表現させていただきましたが、いわゆる支援者の中でもハイリスクを背負っている方がたとの対話です。

1、活動

(1) 避難所での対話活動

最初に避難所での対話ですが、活動場所は福島県福島市の公共施設であります、福島テルサ、東総合体育館、福島大学、あるいは福島県相馬郡の保健センターの保健所でも対話活動をしていました。活動の目的は避難者の状況を把握して、必要事項を管理者に伝え、避難者の心の負担軽減を目的とするというものです。活動内容は避難者との対話ということでございます。

次に別の対話活動についてです。活動場所は福島県相馬市、ここでの活動が一番長期的に行われております。場所は私立中村第一小学校という避難所でございます。活動目的は、医療チームに敷設されました心のケアチームの一員として参加をさせていただいております。避難者と医師、または保健師とのつなぎ役をして避難者のサポートをすること。あるいは学校管理者のための児童把握のサポートをさせていただこうというものです。活動内容としては、児童との対話を主にしておりまして、遊戯などを通して、児童がどのような

状態にあるのかを把握し、必要があれば医療者、あるいは保健師につなげ、異常があれば何らかの処置をとっていただくというような役割をいただいております。

遊戯などを通してということで、実は私たちメンタルケア協会でも、ブレスレットを作るというレクリエーションをいたしまして、子どもだけでなく、大人も参加して下さったりしました。具体的な話をしますと、私たちのメンバーは天然石を使うというこだわりを持った者がおりました。中には紫水晶がありまして、その紫水晶を見た、ある家族をすべて亡くしてしまったご高齢の女性が、「あ～紫水晶だ。実は主人に買ってもらった指輪とイヤリングを持っていたのよね」というお話をしてくださったり、ただ単にブレスレットを作るということだけではなくて、いろいろな思い出や今の気持ちを語ってくださったりということもございました。

子どもたちとベイブレード（コマ遊び）などの遊びをすることによって距離が縮まってきた、遊びを離れたところで、プラプラしていると「ちょっといい？」と仲間内ではなかなか話せない、他の人がいるところではなかなか話せない気持ちを吐露してくれたり、というようなことが非常に多かったです。ただし、子どもの場合、過剰な関わりは二次被害を引き起こしてしまうことがあるので気を遣っていました。中には一月以上経つと、PTSD（心的外傷後ストレス障害）の症状が出てくるということで、夢に出てくるとか、フラッシュバックが起きてしまうというようなお子さんもいまして、そういう子どもを医療者につなげたり、保健師につなげたりということがありました。

医療チームの保健センターでは毎朝活動開始前にミーティングを行っており、前日あったさまざまなことをシェアして、今日はこういうことに気をつけていこう、改めてこういう情報が入ったという情報を共有していました。また、一日の終わり、夕方5時頃に集まりまして、今日はどういうことがあったか、また明日につなげて、どういうことを留意事項にするかということをお話し合うミーティングを行いました。

(2) 電話相談・手紙相談

これはさきほど申しました、ライフリンクの活動であります電話相談、手紙相談です。先ほど野呂さんからご報告ありましたので、簡単に済ませさせていただきますけれども、フリーダイヤルで福島・宮城・岩手から電話相談を受けられるようになっていまして、主に震災による死別・離別から起こる、ご遺族の方がたの悲嘆の過程から生まれてくる気持ちを聞かせていただく、対応させていただこうというものです。中には、公的な問題、土地や金銭的な問題、こういったことが具体的にどうしたらいいのかという質問が必ずありますので、傍らに弁護士さんが備えていてくれ、対応したりいたしました。

このような活動をもしご存知のない方がいらっしゃったら、ぜひ東北のご友人のお寺さんなどにもお知らせいただくとご活用いただけるのではないかと思います。なるべくこういう窓口が多いと、その方によって、かけやすいとか、かけにくいとか、つながりやすいところ、つながりにくいところを振り分けて考えられるようになってきたりして、その方

にとって有益な情報となりますので、ぜひ活用していただきたいなと思います。

※現在では、社会的包接サポートセンターが「寄り添いホットライン」という電話相談窓口（24時間対応）を開設しております。

(3) 支援側ハイリスク者との対話

活動の3として、先ほど申し上げました、支援側ハイリスク者との対話ですが、主に私は相馬市の保健センター職員、避難所を管轄している行政、あるいは学校の管理者との対話を続けております。活動の場所は施設内であったり、ご自宅であったり、会いやすい公園であったり、飲食店とかそういうところを指定していただいて、待ち合わせをしてお話をさせていただいております。活動の目的は支援者の安息、間接的な被災者の支援ということになりますけれども、この活動の主な対象は行政や学校職員、医療従事者など被災地の支援を行ってきた人との対話です。

2、活動上の問題とその対応

活動上の問題とその対応ですが、(1)の避難所での対話につきましては、避難所の管理者と幼稚園との連携が非常に良くて、話し合いの場を設け、協力体制を整え、より充実したサポートができたという風に思っております。特に問題というのは私自身は感じていないのですが、後に支援者との対話に至ったきっかけというのが、私たちが一番最初にこの中村第一小学校に入らせていただいたとき、多くの住民や保健師さん、そういった方がたと個人的な関係が深まって、名刺のやり取りなどをして初めて私が僧侶であることが分かり、「お坊さんだったら、こんなことを聞いたかったのに」とか、「お坊さんだから言えたことがあったのにな」というようなことも言われたりしました。こういうことがありまして、この後報告させていただきます、支援者側ハイリスク者との対話というのが始まりました。そのような経験から、亡くなられた方が多い被災地で宗教者を名乗ることは大きなリスクがあるとの指摘もうけますが、敢えて宗教者であることを明示して会うことも必要なのかなと思いました。

2つ目に、電話相談・手紙相談での問題点ですが、これは明らかに相談窓口や人員が少ないということが言えるかと思われま。これは先ほど申しましたように、ライフリンクが中心となってさまざまな団体に呼びかけ、窓口や対応人員を増やしているという状況です。

3つ目に、支援側ハイリスク者との対話についてですが、職員への配慮から対話自体が困難になっているという事態になっております。中には「うちの所長さんは疲れているから」という風に、職員さんが気を遣ってくれているということがあって、対話に結びついたらということもありますし、たまたま廊下でばったり会って、「お疲れさまです」という自然な言葉掛けから、「いやー、本当にお疲れさまだよ」というひと言に始まって、「じゃあ、

仕事後にお酒飲みながら話しましょうか」と対話が始まったりしたこともあります。基本的にハイリスクを背負っていらっしゃる方というのは、他の職員の方に対する気遣いから、なかなか本音を言えなかったり、自分自身が休息を得る時間を省いていらっしゃるという問題がありまして深刻です。今後、どうやってこの問題を解決していくかということ、考えていかななくてはならないなと思っております。

3、その他の問題

その他の問題ですけれども、1つ目に被災者以外のおいてきぼり感というのを考えております。先ほど、どこまでが被災者で、被災者でないかという野呂さんのご発言がありましたけれども、私の場合は敢えて分かりやすいように、被災者以外のおいてきぼり感とさせていただきます。震災後、多くの方がたのまなざしが被災地・被災者に注がれていますが、その影には震災前から悩みを抱えてきた被災者以外の方が、おいてきぼり感を抱き、心の葛藤を深めているという現状があります。

これは震災前からの個人的な活動で、いろんな相談者からの声をいただくことにより気付いたことでもあります。「被災地ばかりに気持ちが向いてしまっている」「自分の話がしづらくなっちゃったな」ということをおっしゃる方であったり、「私の悩みなんて、被災された人に比べたら、なんでもないんだろうな」とおっしゃる方もいます。また違う団体で行っております被災者に限らずに受けている手紙相談でも必ず冒頭に、「今回の震災があって私の悩みなんて……」という風に手紙を書いてこられる方なんかもいて、もともと震災前から悩んでいた方が遠慮がちになってしまっていて、なかなか自分の正直なつらさや苦しさを吐露できない状況になってしまっている、という問題がございます。

2つ目に風評を起こす人びとへの配慮についてです。午前中、秋央文師のご発表（本誌5月号）がありましたが、放射線の問題がそれでございます。風評を招く言葉の正しい理解を促し、風評被害の縮小を目標とするのと同時に、風評を起こす人びとが、日常的に抱える不安に関心を向ける必要があると考えます。すべての人びとの心に関心を向けることが、風評被害の歯止めとなるのではないかなと思います。風評を起こす人びとの悪意を感じられるものであっても、悪意を抱くに至る、その人の気持ちも慮りたいなと思っております。

3つ目は、ボランティアの対立です。現地に赴くボランティアが対立し、良い関係、良い協力体制が整っているとはいえない状況があります。活動場所を取り合ったり、活動していることを主張したりしているだけの団体も見受けられ、支援の対象となる被災者よりも、支援者個人のための活動となり、被災者に二次被害を与えているという現状があります。仏教者もこれは例外ではなく、私も自戒をこめて申し上げていることですが、仏教を規範としているものとして互いに信頼し、尊重し合い、本当の被災者のための活動を心がけたいなと思っております。時間が超過しましたので、私からの発表は以上とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。